

桃山・江戸前・中期の産衣十三領について上

——近世小裁・中裁衣類調査報告——

神 谷 榮 子

内 容

- 一 はじめに
- 二 産衣十三領の概要
- 三 各産衣について
 - (1) 徳川秀忠所用紫麻産衣
 - (2) 伝毛利秀就所用段織綾産衣
 - (3) 伝毛利秀就所用緋絹産衣
 - (4) 伝毛利秀就所用紅紬産衣
 - (5) 伝徳川綱誠所用白綾産衣
 - (6) 伝徳川綱誠所用薄浅葱小紋産衣
 - (7) 伝伊達綱村所用樺色網干に具模様友禪産衣
 - (8) 伝伊達綱村所用白羽二重産衣
 - (9) 伝伊達吉村所用浅葱宝尽し模様友禪産衣
 - (10) 刈田嶺神社所蔵白平絹産衣イ
 - (11) 刈田嶺神社所蔵白平絹産衣ロ
 - (12) 刈田嶺神社所蔵白木綿産衣イ
 - (13) 刈田嶺神社所蔵白木綿産衣ロ
- 四 むすび

一 はじめに

われわれ染織工芸史の研究分野では、現在はまだ資料蒐集と遺品資料検討のいわゆる基礎固めの段階である。こういった基礎研究の途上に、染織品の大部分を占める衣類のうち、必然的に大人の衣類が多い中にも屢々子供用の衣類がある。大人用の衣類は仕立て替えその他で、出来た当初の原形をとどめぬものが大部分であるが、子供用の衣類は大人用を子供用に仕立て直したものが時折ある以外は、殆どのものが仕立てられた当初の形そのまま、即ち「うぶ」な状態である。この「うぶ」であることは染織品、特に服飾品としては遺品資料の得難い好条件であるから、殆どのものが仕立てが「うぶ」である子供用の衣類は注目に値するであろう。

このような観点から調査をすすめてきたところ、十余年間に発見され調査できた子供用の衣類は、そろそろ比較検討が可能な数に達してきたので、まず江戸中期以前の産衣^{うぶぎ}から報告することとした。

(寸法の単位は cm)

b — a	c 襟肩アキ × 2	d 衿下り	e 立衿 (襟下)	f 衿幅	g 合衿幅	h 前身幅	i 衿	j 袖口	k 襟幅	l 袖丈	m 身丈	重 量	照 合 実測圍	備 考
1.45	6.1	7.0	6.2	7.5	7.5	15.5	28.2	—	6.2	18.0	45.5	26 g	挿図 2	
1.9	6.0	11.0	7.3	7.0	7.5	17.0	30.0	12.8	6.0	24.5	57.5	210 g	挿図 6	
2.47	10.0	15.5	16.5	5.0	5.5	26.0	36.5	15.0	6.0	30.4	64.5	336 g	挿図11	中入綿は 木綿わた
3.61	6.5	—	7.5	—	—	21.0	30.0	12.0	6.0	21.5	54.5	170 g	挿図14	衿なし
1.20	7.0	7.3	8.8	9.5	9.0	17.5	32.0	12.5	6.9	26.5	56.0	180 g	挿図16	
約 1	8.0	5.0	9.5	9.7	9.3	17.0	34.5	15.0	6.0	45.5	93.5	90 g	挿図21	
1.19	9.5	7.0	10.5	10.5	9.5	17.0	32.0	13.0	7.7	29.5	60.0	198 g	挿図27	
1.13	6.0	6.0	6.5	7.0	7.0	15.5	30.0	13.5	6.0	19.5	45.0	72 g	挿図31	
1.09	6.5	5.5	8.7	9.5	9.3	16.7	28.5	14.0	6.7	25.5	70.0	210 g	挿図37	
1.16	9.0	4.0	8.5	10.0	10.0	16.5	33.5	15.0	7.0	34.5	71.0	194 g	挿図43	
1.13	7.8	3.8	7.5	10.0	10.0	15.5	32.0	15.0	7.0	34.5	71.0	173 g	挿図46	
1.0	9.0	9.0	13.0	10.0	8.5	14.5	30.0	13.0	7.5	35.0	59.0	270 g	挿図49	中入綿は 木綿わた
1.12	7.5	6.5	19.0	10.0	8.0	14.5	31.5	14.0	8.2	35.2	63.0	285 g	挿図51	中入綿は 木綿わた

子供用の衣類は、わが国の裁縫用語で大人用のものを大裁^{おおだち}(又は本裁^{ほんだち})
 というのに対して小裁^{こだち}(一つ身、三つ身の類、一つ身は初生児から一、二才
 までの乳幼児用、三つ身は二、三才から四、五才ぐらいまでの幼児用)、中裁^{ちゆうだち}
 (四つ身の類、五、六才より十二、三才ぐらいまでの幼少年用)と称している
 ので、この報告は「近世小裁・中裁衣類調査報告一」とした。

なお「産衣」の用語に関しては「四 むすび」の項で触れるが、この
 報告一の「産衣十三領」は単なる便法として、初生児から一、二歳まで
 の小児の用いる小袖、帷子を一括「産衣」と称した。

二 産衣十三領の概要

これまでに発見された産衣を報告発表の便宜上、江戸中期までのもの
 で区切ると、冒頭の内容「三」で列挙した十三領となる。列挙の順序は
 時代順で、これらについての由来、伝来を略述すると次のようになる。

(1) 徳川秀忠所用紫麻産衣

東京・徳川将軍家墓地発掘調査団預り

昭和三十三年(1958)八月、東京芝増上寺の徳川将軍家墓地の改葬に当
 って、二代将軍秀忠の墓から発掘されたもので、漆塗手箱の中に産毛と
 臍の緒の包みと共に納められてあった。

徳川秀忠は天正七年(1579)四月七日浜松城に於て出生、徳川初代将軍
 家康の第三子、母は側室西郷の局で戸塚五郎大夫忠春の女、歿年月日は
 寛永九年(1632)一月二十四日^{註1}である。

桃山・江戸前・中期産衣、形状・法量一覧表

	中入綿	紐	守縫 背縫	肩あげ 腰あげ	袖の形	袖附	身八つ口	紐通し穴	a 袖幅	b 後身幅
(1) 徳川秀忠産衣 天正7(1579). 4. 7 生	単衣	附紐	守縫	なし	平袖	17.0	—	7.5	11.5	16.5
(2) 伝毛利秀就産衣 文禄4(1595). 10. 18 生	薄綿入	附紐	背縫	なし	小袖	24.5	—	10.5	10.0	19.0
(3) 同上	綿入	附紐	背縫	なし	振小袖 附袖	14.5	8.5	—	10.5	26.0
(4) 同上	薄綿入	附紐	背縫	なし	振小袖 附袖	12.0	7.0	—	6.5	23.5
(5) 伝徳川綱誠産衣 承応1(1652). 8. 2 生	薄綿入	附紐	守縫	なし	小袖	26.5	—	11.0	14.5	17.5
(6) 同上	袷	附紐	守縫	なし	振小袖 附袖	23.0	11.0	—	17.0	17.5
(7) 伝伊達綱村産衣 万治2(1659). 3. 8 生	薄綿入	附紐	守縫	肩あげ	小袖	13.0	14.0	—	16.3	19.5
(8) 同上	薄綿入	附紐 (背)	守縫	なし	小袖	19.5	—	—	15.0	17.0
(9) 伝伊達吉村産衣 延宝8(1680). 6. 28 生	綿入	附紐	守縫	肩あげ	小袖	14.0	10.0	—	16.0	17.5
(10) 刈田嶺神社所蔵産衣 絹イ 享保10(1725)又は享保13(1728)	綿入	欠	守縫	なし	小袖	34.5	—	11.5	15.5	18.0
(11) 同上	綿入	欠	守縫	なし	小袖	34.5	—	13.0	15.0	17.0
(12) 同上	綿入	附紐	守縫	なし	振小袖 附袖	13.0	11.0	—	15.0	15.0
(13) 同上	綿入	附紐	守縫	なし	振小袖 附袖	12.5	10.0	—	15.7	17.7

桃山・江戸前・中期の産衣十三領について上

- (2) 伝毛利秀就所用段織綾産衣
(3) 伝毛利秀就所用緋絹産衣
(4) 伝毛利秀就所用紅紬産衣

右三領 防府・毛利博物館蔵

毛利家伝来のこの三領は毛利家十七代秀就の誕生を祝って徳川家康より贈られたと伝えられている。

毛利秀就は文禄四年(1595)十月十八日広島城に於て出生、毛利家十六代輝元の第一子、母は側室二之丸で兄玉三郎右衛門元良の女、歿年月日は慶安四年(1651)一月五日である。^{註2}

- (5) 伝徳川綱誠所用白綾産衣
(6) 伝徳川綱誠所用薄浅葱小紋産衣

右二領 名古屋・徳川美術館蔵

尾張・徳川家伝来のこの二領は「泰心院様御誕生御式正呉服の内」として伝えられている。泰心院は尾張・徳川家三代綱誠である。^{つなのぶ}

徳川綱誠は承応元年(1650)八月二日江戸市ヶ谷・鼠穴の館に於て出生、尾張・徳川家二代光友の長男、母は御簾中で徳川三代將軍家光の女・千代姫、歿年月日は元禄十二年(1696)六月五日である。^{註3}

- (7) 伝伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禅産衣
(8) 伝伊達綱村所用白羽二重産衣

右二領 東京・平野実氏蔵

平野家伝来のこの二領は四代仙台藩主伊達綱村所用と伝えられてお

り、(8)の白羽二重産衣は(7)の友禪産衣の下着といわれている。

伊達綱村は万治二年(1669)三月八日、三代仙台藩主伊達綱宗の第一子として江戸第に出生、母は側室三沢氏初子、幼名亀千代丸、はじめ綱基という。父の塾居により二歳で封を継いだ^{註4}が、この頃いわゆる伊達騒動が起った。歿年月日は享保四年(1719)六月二十日である。

(9) 伝伊達吉村所用浅葱宝尽し模様友禪産衣

東京・平野実氏蔵

平野家伝来のこの産衣は五代仙台藩主伊達吉村所用と伝えられている。

伊達吉村は延宝八年(1680)六月二十八日伊達肥前宗房(二代仙台藩主伊達忠宗の四男)の第一子として黒川郡宮床館に出生、母は片倉氏於松、四代仙台藩主伊達綱村に子無きため元禄八年(1695)十二月世子となり、同十六年(1703)五代仙台藩主となる。歿年月日は宝暦元年(1751)十二月二十四日である。^{註5}

- (10) 刈田嶺神社所蔵白平絹産衣イ
- (11) 刈田嶺神社所蔵白平絹産衣ロ
- (12) 刈田嶺神社所蔵白木綿産衣イ
- (13) 刈田嶺神社所蔵白木綿産衣ロ

右四領 宮城県・刈田嶺神社蔵

五代仙台藩主伊達吉村の生母片倉氏阿松、貞樹院常照が享保十年十二月と享保十三年十一月の二回、それぞれ二領ずつ刈田嶺神社(別名を刈

田白鳥児神社ともいう)に奉納したものとして伝えられている。奉納時の箱が二個あり、それぞれの蓋に「産衣 二領 享保十歳臘月吉日 奉刈田白鳥児神社 貞樹院常照」「産衣 二領 享保十三歳十一月吉日 奉刈田白鳥児神社 父神社 貞樹院常照」とあるが、伝えられている産衣四領の中、何れの二領が享保十年で、何れの二領が享保十三年であるかは不詳である。

貞樹院常照は、片倉家三代小十郎景長の一女於松で、万治元年(1658)五月一日白石城に生まれた。母は片倉景長の室で古内主膳重広の一女、後の鑑照院である。田手氏伊達肥前宗房に嫁して長子吉村、次子村興を生む。貞享三年(1686)一月十三日宗房四十一歳にて歿す、時に於松二十九歳、以後貞樹院と称す。歿年は享保十七年(1732)、享年七十五歳、法名は貞樹院殿心台常照大姉である。^{註6}

以上十三領は、秀忠の産衣から刈田嶺神社奉納の産衣まで百五十年間の現存遺品であるが、偶然にもこれらは何れも武家の産衣であったため、同系である故に相互の比較も容易となり、武家の産衣における様式や変遷の概要も示される結果となった。

さて、これら十三領を概観すると、一口に言って十三領は何れも「うぶ」である。そして「うぶ」な形態、仕立てから考察をすすめると、伝来にもとづく所用者生誕当時の大裁(成人用)小袖、大裁帷子に見られる特徴(美術研究二二八号「伝上杉謙信所用小袖十二領―一六頁―一九頁、美術研究二二三号「伝上杉謙信所用帷子四領―二頁―三頁照合」)が、これら産衣に

は小形ながらそれぞれによく備わっており（二）三頁表、並びに後述の各産衣「形状、法量、仕立て方」照合）、そのような形態、仕立ての立場からは、ほぼ伝来の時代的裏付けは行うことができたのである。

ところでこの十三領の形状、法量（表照合）並びに仕立て方を概観すると、時代の上るもの、即ちこの中では徳川秀忠と毛利秀就の産衣の計四領(1)(2)(3)(4)は、室町末、桃山、江戸初頭の大裁初期小袖の最も目立つ特徴である狭い袖幅(a)と広い身幅（後身幅はb、前身幅はh）、短い立棲(e、襟下)、狭い襟肩アキ(c)が小形であるために大裁の初期小袖よりは誇張されていて著しい特徴となつてあらわれている。それらの特徴は時代が下るに従つて袖幅が広くなり身幅が狭くなつて、江戸の中期になると、伊達吉村産衣(9)や刈田嶺神社産衣(10)(11)(12)(13)に見られるように江戸後期以降の産衣とほとんど変らない形になっているのがわかる。大裁の小袖、帷子、胴服の場合、室町、桃山、江戸初頭、江戸前期と変化を続け、江戸中期になると一応形が整つて決まるようで、その形が江戸後期、幕末、明治と形態の上では殆ど変化がないのであるが、これと同様な現象がこの武家の産衣にも見られるようである。

ただ小裁の場合は大裁の小袖、帷子と異つて、江戸中期、後期、そして明治になつても立棲(e、襟下)が大裁のものの比率ほどには長くならず、初期の頃の産衣と大差なく短い、それには次のような理由が考えられるのである。歩行前の乳児には腰あげはせずに長いまま着せておくが、それには襟は下方までつけている方が裾の乱れが少く保温上着装上好都合であろう。そして歩行する頃になつて「あげ」をする段になると、襟は下方まで附いている（立棲が短い）方が腰あげがしやすく、また

腰あげをした後の形も安定のあるよい恰好になるからだと思われる。

また一つ身には背縫がないものであるが、毛利秀就産衣(2)(3)(4)には三領ともに背縫があり、従つてこれら三領には、通常一つ身の背中上方に背縫の糸じるしのように施される「^{まよりぬい}守縫^{註7}」がない。十三領中、他の十領には何れにも守縫があり、(12)(13)の刈田嶺神社木綿産衣二領には特殊な守縫と今日行われている女児用の守縫である二た目落としの守縫が行われているが、他の八領には何れも今日男児用に行われる二た目落としの裏針目の守縫が施されている。刈田嶺神社奉納の産衣四領はともかく、他の九領はすべて男児用産衣であるから、今日男児用に行われている二た目落とし裏針目の守縫は少くとも徳川秀忠の出生した天正七年には既に行われており、その後も武家男児の産衣には大方の場合にこの二た目落とし裏針目の守縫が施されていたことが知られる。

附紐は下着になる伊達綱村産衣(8)が背に縫いつけられているほかは、今日の小裁、中裁の着物同様、上前下前にそれぞれつけられている。紐附の飾り縫は江戸の中期頃まではほとんどなかったのではなからうか、刈田嶺神社木綿産衣(12)に簡単な附紐飾り縫らしいのがある以外は何れにも見られない。

その附紐を通す穴は、後世は袖の振や身頃脇の身八つ口を紐通しの穴に兼ねさせているが、初期の二領徳川秀忠産衣(1)、毛利秀就産衣(2)には、袖附に、上前の紐が通る右脇には袖附の前後に穴があけてあり、下前の紐が通る左脇には後袖附にだけ紐通し穴があけてあるといった合理的な工夫が見られ、それと同様な紐通し穴が江戸中期の刈田嶺神社絹産衣二領(10)(11)にも見られる。江戸前期の徳川綱誠産衣(5)追加(1)(2)、(7)(9)の五領

の紐通し穴は左脇の袖附前にも右脇の袖附前と同様に穴があけてある。

肩あげのあるのは江戸前期の伊達綱村産衣(7)と伊達吉村産衣(9)の二領だけである。

袖の形は徳川秀忠産衣(1)が平袖である以外は小袖で、その中で振のついているのが毛利秀就産衣(3)(4)、徳川綱誠産衣(6)、刈田嶺神社木綿産衣(12)(13)の五領である。袖に関して江戸後期の産衣まで通して見ると、古い時代のは総体に袖が小さく(袖幅が狭く、袖丈も短い)、それが次第に袖幅も袖丈も伸びて、江戸中期以降は大きい袖に一定しているようである。

仕立ての方も大裁のものと同様、初期のものは裁断も縫製も鷹揚で、技術的には粗い感じを受けるものさえあるが、江戸初頭を過ぎる頃からは次第に丁寧になり、中期近くになると後期以降のものと殆ど変らないまでに技術が達者でかつ丁寧になっている。

次に用いられている裂地は、麻が一領(1)、絹が十領(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)、木綿が二領(12)(13)で、この中(2)(3)(4)の裏裂は木綿である。また中入綿は(3)(12)(13)は真綿ではなく木綿わたである。この中(12)(13)の刈田嶺神社の産衣に木綿裂、木綿わたが用いられているのは江戸も中期で木綿が広く使用されていた時代であるから奉納された産衣四領中二領が絹、二領が木綿であっても別に問題はないが、(2)(3)(4)の毛利秀就の産衣の裏に木綿裂が使用され、なお(3)の中入綿は木綿わたであるのは当時としては非常に貴重なものが使用されていることになる。木綿は室町時代に主として朝鮮から輸入され、綿種も木綿とともに伝来し普及して各地で試作され、やがて国産の木綿も農家の副業として織出されるようになるが、明応三年(1494)越後上杉領での「みわた」、永正七年(1510)奈良市場に出

まわった三川(河)木綿がその早い例となっている。^{註8} 徳川家康より毛利秀就の誕生を祝って贈られたというこの三領の産衣に、三河国にゆかりの深い家康が、いまだ産出の少ない木綿を用いたことは解されることである。

絹では、(2)の表裂の段織になった綾、(3)は節糸を使った緋絹、(4)は紅紬、(5)は地紋が宝尽し文様の白綾、(6)は薄浅葱小紋染の平絹、(7)が樺色友禅染の平絹、(9)が浅葱友禅染の綸子、(8)(10)(11)は白羽二重となっている。

この中(7)の友禅染は万治二年のものであるから、当時すでにこれだけの優れた友禅染技術があったことは、従来の友禅染に関する見解に再考を要する問題を提起している。

また、この中紋附は(5)(6)(7)(9)の四領で、(5)は繻の五つ紋、(6)(7)(9)は白の染め抜きに墨入れをした五つ紋である。この紋の周囲に松竹梅鶴亀が箔絵等で施してあるのは(5)(6)で、(5)は銀の箔絵、(6)は染抜きの白に墨で描いてある。このほか(10)(11)の刈田嶺神社絹産衣二領は紋はないが、紋の位置五ヶ所に松竹梅鶴亀が金箔絵で施されている。

以上は現存江戸中期までの武家の産衣十三領の概要で、以下順次個々の詳述を行う。

三 各産衣について

(1) 徳川秀忠所用紫麻産衣(図版Ⅲa、b、挿図1~4)

この産衣は、昭和三十三年(1958)八月に徳川二代將軍秀忠の墓から発見されたものであり、すでに「伝上杉謙信所用帷子四領」の報告論文においても紹介し(美術研究二三三号、三頁、六頁、註10、11、12)、更に、徳

川將軍家芝増上寺墓地改葬に当つての報告書「増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体」(鈴木尚・矢島恭介・山辺知行編、東大出版会昭和四十二年十二月発行)のV徳川將軍墓の副葬品(担当―山辺知行・神谷榮子)の項目に於て報告発表した(九四頁〜九六頁)ところであるが、現存する最古の産衣である点、特に注目に値するので、一部重複することを了承いただいて詳述したいと思う。

東京芝増上寺の徳川將軍家墓地の改葬は昭和三十三年(1958)八月から約二年間にわたつて行われたのであるが、まず二代將軍秀忠の墓から始められた。この産衣は、墓穴の中の棺外にあった漆塗の手箱に納められてあつた(挿図1)もので、一緒に産毛うぶげと臍の緒の包みがあつた。秀忠は天正七年(1579)四月七日浜松城に於て出生、父は徳川家康、母は側室西郷の局で戸塚五郎大夫忠春の女である。

この産衣は紫麻の単衣で、地質が丈夫な麻であつたために、出土状況は決してよかつたとはいえないのであるが、形はほぼ完全で、図版Ⅲa、bに見られる通りである。全体の形に、袖幅(a)が狭く身幅(b)が広い、そして立衿(e、襟下)が非常に短い初期小袖の特徴が見られ、後世の産衣にくらべて身丈が極端に短く衿の短いのが注目される(表、実測図参照)。この産衣は夏の衣料であることもあつて身丈や衿が特に短くしてあるのかも知れないが、この寸法では初生児といえども手足の運動があるから足や掌は着物の外に出たであろう。後世の産衣のように裾や袖ですっぱり足や掌をくるむのと異っている点が興味深い。

この産衣は、形態、仕立て方等上杉神社所蔵の謙信用といわれる四領の帷子に共通する点が非常に多く、初期帷子との関連においても注目

される。

(形状、法量、仕立て方)

多少のほころびと少量の破れ、附紐の切断(附紐は紅平絹で、絹は麻にくらべて弱いので同じ出土条件でも傷んでおり、産衣を手箱から出して扱った際に畳んであつた折目から、上前の紐も下前の紐も切り離れてしまつた)があるが、この産衣は殆ど完全である。

形状、法量は一覽表の(1)並びに挿図2、附紐共の総重量が二六グラムという至つて軽い麻製単衣の産衣である。袖が平袖で、小形ながら初期小袖の特徴をよく備えている。

またこの産衣にも、左右同寸法であるべき左右相称の個所がやはり○・五センチから一センチ近く異つていたりする室町・桃山期の仕立て方の鷹揚さがある。

裁ち方、縫い方はともに、上杉神社蔵伝謙信用所用帷子に見られる初期帷子と殆ど同様である。即ち、襟は一重のまままで広襟になっており、裏襟はついておらず、襟裂の耳はそのまま、襟附縫の襟や前身頃の斜めに余る部分は裁ち出してあり(挿図3a、b)、仕立ては非常に丁寧で、針目も極めて細かく、そして縫糸は絹糸が用いてあるなど、上杉家伝来の帷子四領に見られる手

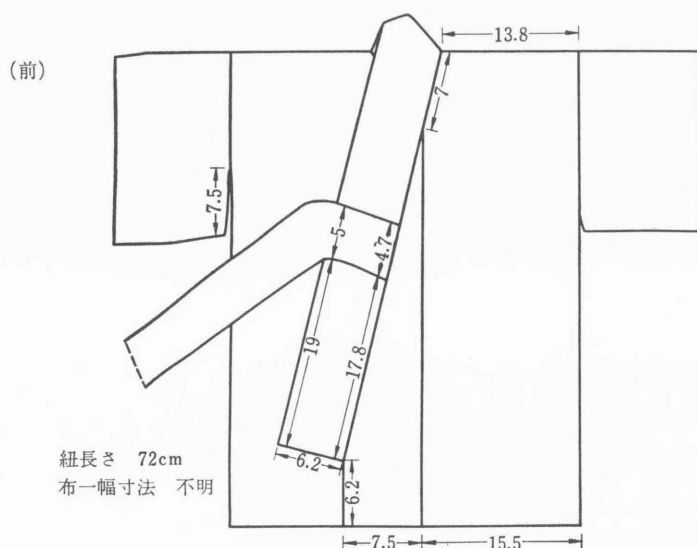
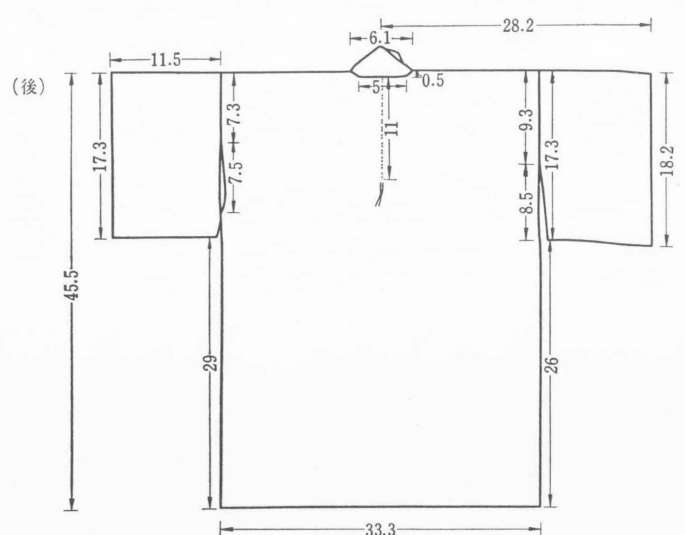
挿図1 徳川二代將軍秀忠産衣の納入されていた漆塗手箱
(中に産髪、臍の緒の包も納入されていた)

法と同一といえる。

この産衣の縫い方を順次述べると、一つ身であるから後身頃には背縫はなく、背には図版Ⅲb、挿図4で見られるような守縫が茶色（紫の褪色？）絹糸二本どりで施してある。この二日目落としを裏面から見た裏針目の守縫は今日でも男児用の守縫に用いられる。^{註7}

脇縫と袖附は約〇・五センチの縫代で、約〇・三センチの針目の平縫、裁ち目は巻き縫でかがってある。

他の縫目は極めて丁寧な縫い方がしてあり、具体的に述べるならば、前述脇縫と袖附以外は裁ち目の箇所はすべて撚りぐけほどの細い縫代で三つ折がしてあり、こまかい揃った針目の返し縫で、縫代がおさえられたようにきっちり縫



挿図2 徳川二代将軍秀忠産衣(1) 実測図

われている。その針目は帷子の表側から見て約〇・一センチで、今日のミシン縫の針目のようにきれいに揃っている（挿図3a、b）。

縫糸は茶色（紫の褪色であるかも知れない）の絹糸二本どり（脇縫と袖附縫の裁ち目のかがり縫は一本どり）で、縫糸の撚はZ撚である。守縫の糸も同じ糸である。

附紐は幅約五センチ、長さ約七〇センチの紅平絹（紅が褪色して黄色になっている）で、後世の多くの附紐に見られるような、二つ折りに縫い合わせてあったり、裁ち目がかがってあったりすることなく、裂を縦に引きさいたまま用いである。こういう附紐を見るとまことに無雑作で乱暴なようであるが、このように引きさいて作った紐は当りがやわらかく、縮りがよいものであるから、初生児の特に夏季の産衣では肌に当りが柔らかで、暑くるしくなく、また適当に

紐の縮りをよくしたという合理性に基づいたものではなかったかと思われる。この合理性は紐通しの穴にも言えることで（挿図2実測図参照）、右脇は上前に附けられた紐が着物の上を押えて通るので、紐の通る位置を丁度袖の振や身頃の身八つ口のように袖附の下方が縫わずにあけてあり、左脇は下前の紐が表に出て後にまわるので、前には紐通しの穴はなく、背面にだけ袖附の下方に紐通し穴があけてある。後世の小裁の衣類では紐通しの穴は左右同じにあけてあったり、左右同寸法の振や身八つ口を適当に紐通し穴に使用するのであるが、この初期小袖時代の産衣は紐通し穴一つにも苦心した様子が窺われる。

（裂地、紐裂）

産衣の裂地は褐色がかっているが紫色の麻で、後染である。麻の種類は苧麻で、生地は薄く目がつんでい

挿図3 徳川二代將軍秀忠産衣部分

a 上方部分裏面

b 下方部分, 上前は表, 下前は裏

b.

る良質の上布である。密度は一センチ間に、経糸は二四本前後、緯糸は二二越前後で、糸の撚は経緯ともにゆるくて不詳。布幅も不詳である。

附紐の紅平絹も後染で、経糸、緯糸ともに練っており、密度は一センチ間に、経糸は四本前後、緯糸は三二越前後である。糸の撚は経緯ともにゆるくて不詳。

(2) 伝毛利秀就所用段織綾産衣

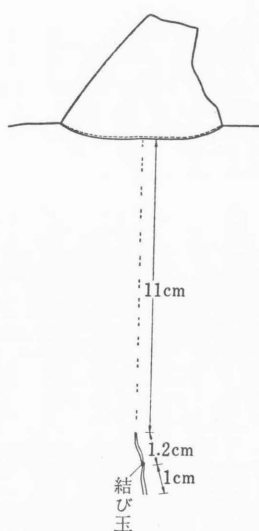
(図版I、II、

挿図5~9)

毛利家の家伝によれば、毛利家十七代秀就所用といわれている三領の産衣

(2)、(3)、(4)の三領、図版I、II、III c、d)は、徳川家康より秀就誕生を祝って贈られたものといわれている。秀就は文禄四年(1595)十月十八日、広島城に於て出生、父は毛利家十六代輝元、母は側室二之丸で児玉三郎右衛門元良の女である。輝元にははじめ子がなく、毛利元就の五男穂田元清の男秀元を養子に迎えていたが、輝元が四十三歳のときに秀就が出生、ために秀元は分家して長府毛利家をおこした。秀就が出生した当時豊臣秀吉は健在であり、毛利輝元は徳川家康と秀吉の部下として対の地位等にあつたから、家康は交誼上秀就の誕生を祝って産衣三領を贈つたものと思われる。この産衣はその三領中の一領で、表裂に段織になつた綾を用い、裏裂に白木綿、襟に臙脂色紬、附紐に紅平絹を用いた薄綿入の産衣である。徳川秀忠の産衣より十六年後のものになるが、全体の形が酷似しており、小形ながら初期小袖の特徴をよく備えている。小裁であるが背縫があり、守縫がない。この全体の形が秀忠の産衣に酷似しており、更に産衣でありながら背縫があつて守縫がないことは秀就の産衣三領に共通している点である。

表裂の段織の綾は文様からいうと菊唐草にちきり文(挿図7)、桜に蔓橘立涌文(図版I、II、挿図5参照)格子に向い鶴の丸文(挿図8)の順に三



挿図4 徳川二代將軍秀忠産衣背面守縫実測図

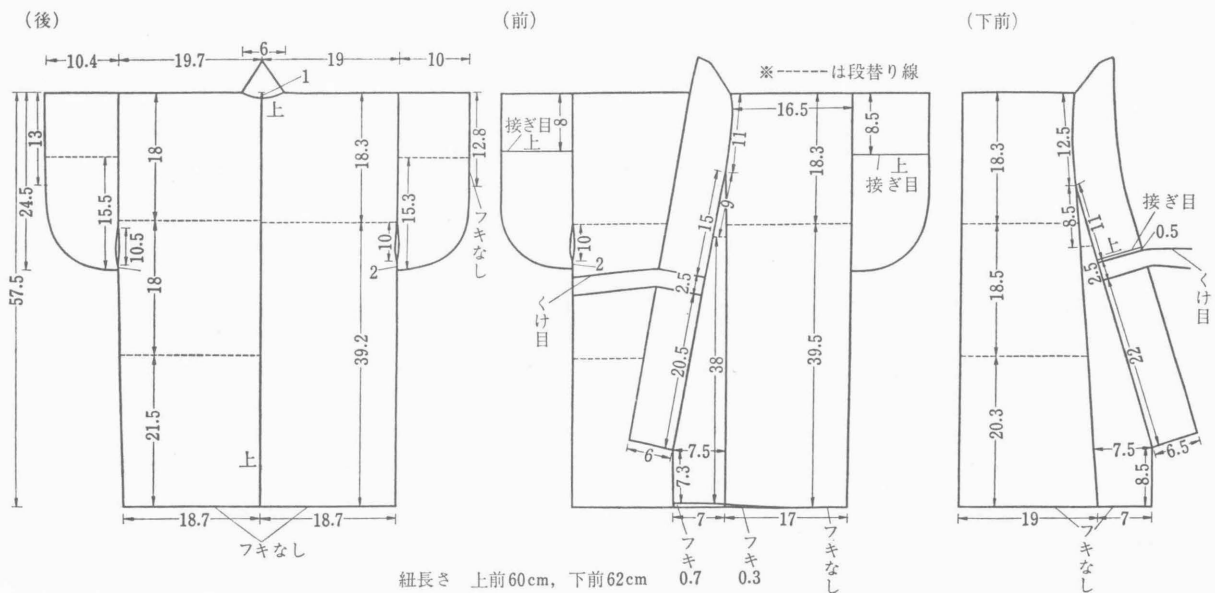
段構成になつた綾であるが、桜に蔓橘立涌文が一つの段の中で鶺鴒色、紅、鶺鴒色と三段二色の色替りに構成され

ているので、この段織の綾を色替りの構成からいうと紅と黄と茶が薄く
 堅縞に入っている白茶（菊唐草にちきり文の地色）、鶯色、紅、鶯色（桜に
 蔓橘立涌文の地色、三段の色替り）、赤茶（格子に向い鶴の丸の地色）の五段
 構成である（挿図9）。

文様の中、菊唐草にちきり文は珍しい組合わせで、桃山時代の能装束
 にちきり文が時に見受けられるが、この裂のちきり文は紋章の膝紋と同
 様で二個のちきりを九十度斜めに重ね合わせて、三角形を作り、菊唐草
 の間を巧みに埋めている構成は菊唐草とちきりの便化が見事であること
 もあって秀逸である。

桜に蔓橘立涌文は、折枝風な桜や橘の便化が面白く行われており、何

挿図5 伝毛利秀就段織綾産衣(2) 下前

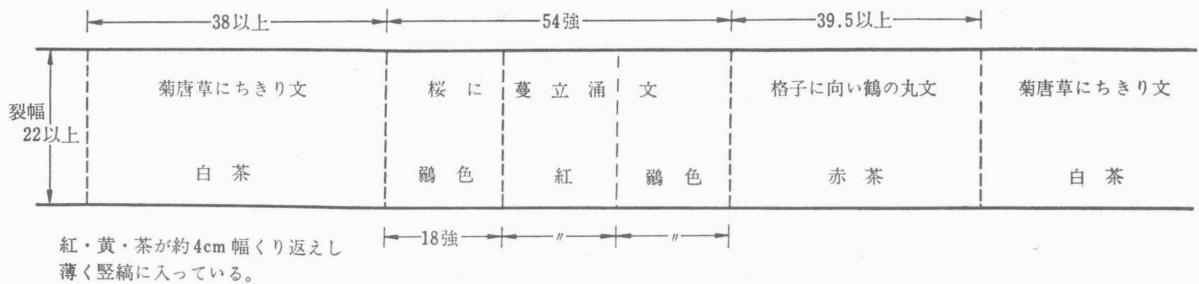


挿図6 伝毛利秀就段織綾産衣(2) 実測図

れも立涌からあふれ出ている点など如何にも桃山期の意匠らしく雄大である。
 格子に向い
 鶴の丸文は、
 有職風な向い
 鶴の丸が格子
 で囲まれてお
 り、伝統的な
 文様が近世化
 しているとも
 いえる。
 このような
 三種類の文様
 が、さきに述
 べた四種類五
 段の色替り構
 成になってい
 るので裂自体
 がすでに多少

挿図 8 伝毛利秀就段織綾産衣(2)
部分 (格子に向い鶴の丸文)

挿図 7 伝毛利秀就段織綾産衣(2)
部分 (菊唐草にちきり文)



挿図 9 伝毛利秀就段織綾産衣(2) 表裂の段構成見取図

繁雑である。その裂で面積の少い産衣が大人の小袖のように段替り構成で仕立てられており、加えて襟、附紐には別裂が用いられてあるので、産衣全体として見た場合、意匠は繁雑に過ぎる感がある。しかし、上質の綾裂を用いた凝った産衣であり、また次の調査諸事項をも合わせ考えた結果は、時代的に言って秀就出生当時の産衣であることに異論はない。

(形状、法量、仕立て方)

桜に蔓橘立涌文の紅の段に損傷が見られる以外は傷みもなく保存もよい。

形状、法量は一覧表の(2)並びに挿図6、徳川秀忠の産衣が夏物であることもあってのことと思われるが、秀忠の産衣(1)よりも多少大ぶりで、特に丈は十二センチばかり長い。総重量が二一〇グラムの薄綿入れで、裏は白木綿の通し裏である。襟は臙脂色紬の別裂で、襟裏には裏裂と共の白木綿が用いてある。附紐は紅平絹の紙芯入り平ぐけ紐で、この紐には摺箔と朱描の模様があつたらしく、紐を縫いつけた襟の端から、上前紐は六センチ、下前紐は一一・五センチ離れたところに、それ

ぞれ堅径二センチ横径二・三センチの円のような菱のような、摺箔の外郭を朱描したらしい模様の跡が見られる。この紐に入っている紙芯は損傷部分から観察すると二重にして折り畳んであり、上側、即ち紐裂の紅平絹に接する側の紙は紅で染めてある。

この産衣にも、左右同寸法であるべき左右相称の個所が、〇・五センチから一センチ近く異り、袖も上前衽に〇・七センチ角に出ている（袖の側に折り被せがかかっており袖が上になっている）のが自然に消えている以外は見当らず、裾では逆に裏に袖が出ている部分もあるといった室町・桃山期特有の仕立て方の鷹揚さが随所に見られる。

裁ち方は産衣であるにもかかわらず、後身を二裂にした背縫のある仕立てで守縫はない。背縫の折被せは、表裏とも今日われわれがいう正常とは逆側が上、即ち表も裏も右側の身頃が高く（上に）なっている（美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照）。袖には左右とも前に接ぎ目があり、折り被せは右袖は上方が高く（上に）、左袖は下方が高く（上に）なっている。襟にも下前の附紐位置のやや上方に接ぎ目があり、この折り被せは上方が高く（上に）なっている（挿図6、実測図参照）。袖下の縫代は左右とも今日の仕立て同様前側に入っている。

紐通し穴は挿図6の実測図に示したようになっており、徳川秀忠産衣(1)と同様左前身頃の袖附には穴はない。紐通し穴三つの中、左後身頃の穴には下端に補強のための留^もがあるが他の個所にはない。

附紐は白絹糸でくけつけてある。

仕立ては総体に丁寧でなく、どちらかといえば粗い縫製に属し、これは秀就の産衣三領の仕立てに共通していえることである。縫目は平縫が〇・三センチから〇・四センチ、くけ目が一センチ前後、ところによっては一・五センチぐらいの針目になっている。

縫糸は、表と表の縫合わせ（この場合は絹と絹との縫い合わせ）と襟附がZ摺の白絹糸で、裏と裏の縫い合わせ（この場合は木綿と木綿の縫い合わせ）、表と裏の

縫い合わせ（この場合は絹と木綿の縫い合わせ）には晒してない麻糸（苧麻糸）が用いている。

（表 裂）

前述したように「菊唐草にちきり文」「桜に蔓橘立涌文」「格子に向い鶴の丸文」の三種類の文様が、以上の順序で、四種類、五段の色替り構成になっているのがこの表裂である。裂幅は不詳であるが、その他はこの産衣から推測、又は測定できるので左に列挙する。

「菊唐草にちきり文」の段の長さは三八センチ以上不詳（図版Ⅰ、Ⅱ、挿図5並びに挿図6実測図の段替り線を照合されたい）、「桜に蔓橘立涌文」の段は鶺鴒色、紅、鶺鴒色と三段に区切られている色替りで、一段が一八センチ強であるからこの段の全長は五四センチ強、「格子に向い鶴の丸文」の段の長さは三九・五センチ以上不詳（図版Ⅰ、Ⅱ、挿図5並びに挿図6実測図の段替り線を照合されたい）となっている（挿図9）。

一般の段織と同様、この表裂の段も経糸の締切り^{註11}による色替りと緯糸の色替りの経緯両方からの色替りによって構成されている。

「菊唐草にちきり文」の経糸は約四センチ幅の紅、茶、黄、三色くりかえしの堅縞に配されており、緯糸は白茶である。この段の文丈^{註12}は一一・五センチ前後、窠間幅^{註12}は一七センチ前後である。

次の段の「桜に蔓橘立涌文」は、鶺鴒色の段の経糸は鶺鴒色で、緯糸が黄味の多い萌黄、紅の段の経糸は紅で緯糸は白茶である。この段の文丈は一六・五センチ前後、窠間幅は一七センチ前後である。

その次の段の「格子に向い鶴の丸文」は、経糸は茶色、緯糸は赤味の多い茶色で、格子の横縞の部分は緯糸が白茶になっている。この段の文丈は九・五センチ前後、窠間幅は八・七センチ前後、鶴の丸の径は堅横とも五・七センチ前後である。

以上述べたように三種類の文様が、四種五段の色替りの繰返しで構成されていることを知るが、この裂地の組織は綾で、地が経の六枚綾で右上り、文は緯の六枚綾で左上り、となっている。裂の密度は一センチ間に、経糸は六〇本前後、緯糸は三〇越前後である。

(襟 裂)

臙脂色の紬で、後染である。経糸と緯糸は同程度の太さで、密度は一センチ間に、経糸は三〇本前後、緯糸は二二越前後である。

(紐 裂)

後染の紅平絹で光沢があるが練緯^{ねりゐ}ではない。経糸緯糸とも練り方は少いが練っている。経糸は緯糸に比し細い。密度は一センチ間に、経糸は四二本前後、緯糸は三四越前後である。

(裏 裂)

目の粗い平織の白木綿で、経糸は比較的太く緯糸は細い。経糸、緯糸共にS撚で、この撚は比較的強いようである。密度は一センチ間に経は三〇本前後、緯は一五越前後である。

(3) 伝毛利秀就所用緋絹産衣 (図版Ⅲc、挿図10、11)

一見紬のような節織の緋絹産衣である。この緋絹の赤は色が濃い。(2)段織綾産衣、(4)紅紬産衣と共に家康から贈られた産衣三領中の一領だといわれている。

(2)段織綾産衣より一まわり大きく、振附小袖になっており、袖幅はま

桃山・江戸前・中期の産衣十三領について 上

すます狭く、後身幅は袖幅の二・四七倍(表参照)になっているが、総体に形の上では(2)段織綾産衣と非常に似ている。

裏は表と同程度に赤色の濃い緋木綿の通し裏で、附紐は表の共裂が一重でつけてある。家康より贈られたという三領の産衣の中、この一領にだけは木綿綿^{もめんわた}が入っており(当時の中入綿は大てい真綿—絹綿—であった)、それも比較的厚く入っているので総重量が三三六グラムという量^{かさ}のある産衣になっている。

他の二領と同様、産衣でありながら後身頃に二裂を用いているので背縫があり、守縫がない。

(形状、法量、仕立て方)

全体に損傷が少なく保存もよい。

形状、法量は一覧表の(3)並びに挿図11。前述のように産衣としては大ぶりで、桃山・江戸前・中期の産衣十三領中、桁、身幅は最大であり、重量も最も重い。この産衣は大ぶりであることに比例して襟肩アキ(c)と立襟(e)の寸法が多い。

この産衣でも、左右同寸法であるべき左右相称の個所が、〇・五センチから一センチ余りも異り、襦も不統一であり、袖下の縫代も右袖は前側に、左袖は後側に入っているというように室町・桃山期特有の仕立て方の鷹揚さが見られる。

裁ち方は(2)(4)同様、小裁でありながら後身頃に二裂を用いた背縫のある仕立てで、守縫はない。背縫の折被せは、表は今日われわれがいう正常とは逆側が上、即ち右側の身頃が高く(上に)なっており、裏は今日われわれがいう正常に、即ち左側の身頃が高く(上に)なっている(美術研究二二八号、二〇頁、挿図3

参照)。

この産衣の紐通し穴は、袖の振や身頃脇の身八つ口が兼ねる方法になっている。振や身八つ口には補強のための留は見当らない。

前の紐は表の糸裂を豎に引きさいたと思われる幅約六センチの一重の紐が、上
附紐は表の糸裂を豎に引きさいたと思われる幅約六センチの一重の紐が、上
附紐は表の糸裂を豎に引きさいたと思われる幅約六センチの一重の紐が、上
附紐は表の糸裂を豎に引きさいたと思われる幅約六センチの一重の紐が、上

前の紐は耳が上方、裁ち目が下方に、下前の紐は上方、下方ともに裁ち目にな
っており、襟にくけつけてある個所だけはくけ代分を約〇・四センチ内側に折
り込んで二つ折りにしてある。

仕立ては(2)と同様丁寧ではなく、どちらかという粗い縫製である。縫目は平縫が○・三センチから○・四センチの針目、くけ目が一センチから一・二センチの針目になっている。縫糸には表にも裏にも、表と裏の縫合わせにもZ撚の白絹糸が用いてある。

插图10 伝毛利秀就緋絹産衣(3) 背面

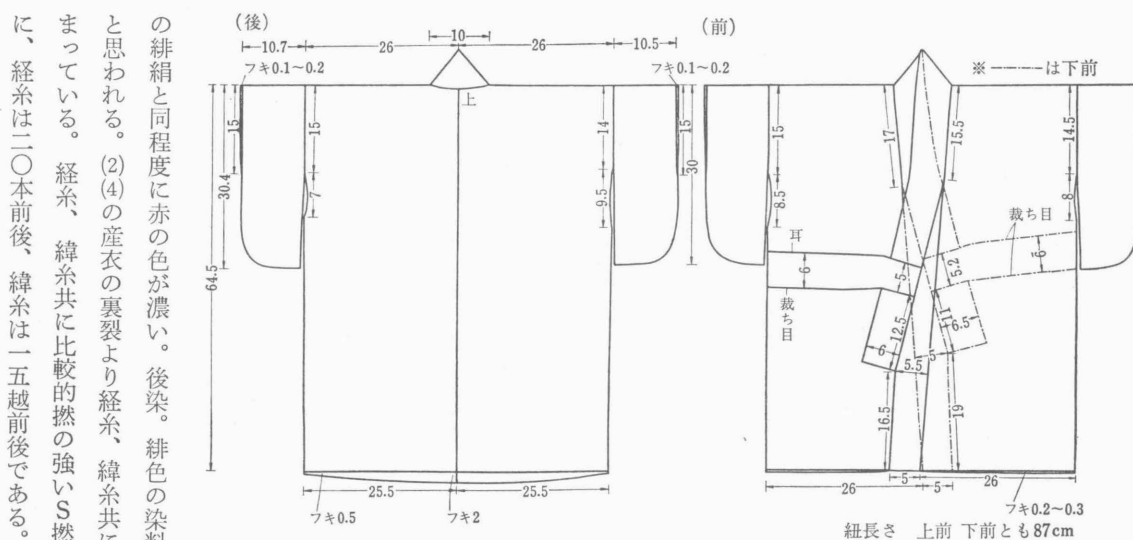


插图11 伝毛利秀就緋絹産衣(3) 実測図

節の多い緯糸で織った紬のような感じの緋色平絹で、この緋色は赤が濃い。後染。染料は何が用いられたか不詳であるが紅ではないと思われる。密度は一センチ間に、経糸は三〇本前後、緯糸は二〇越から三五越ぐらいまで種々ある。紐裂は表裂より幾分色が薄く見えるが、糸質、密度等から表裂の共裂と思われる。

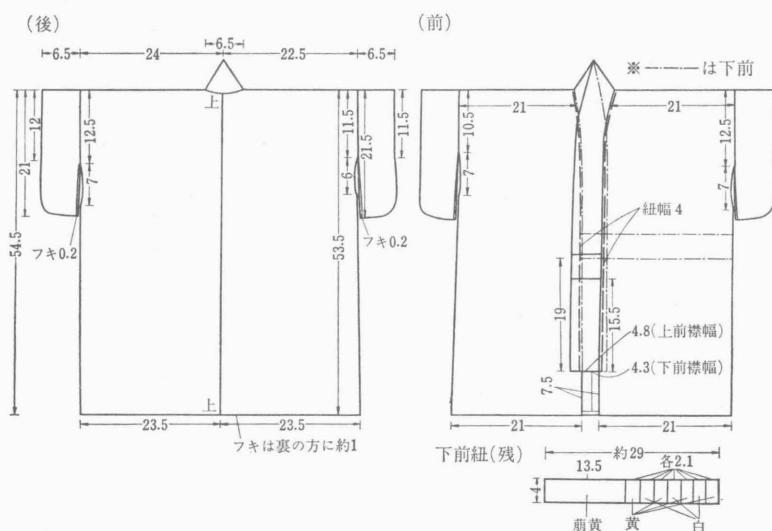
(表裂)

(裏裂)

平織の緋木綿で、表の緋絹と同程度に赤の色が濃い。後染。緋色の染料は不詳であるが紅ではないと思われる。(2)(4)の産衣の裏裂より経糸、緯糸共に糸が太く裂地の目はよくつまっている。経糸、緯糸共に比較的撚の強いS撚である。密度は一センチ間に、経糸は二〇本前後、緯糸は一五越前後である。

挿図13 伝毛利秀就紅紬産衣(4) 下前

挿図12 伝毛利秀就紅紬産衣(4) 背面



挿図14 伝毛利秀就紅紬産衣(4) 実測図

裏は白木綿の通し裏で、薄綿入、総重量は一七〇グラムである。
他の二領と同様、産衣でありながら後身頃に二裂を用いているので背縫があり、守縫がない。
に添って白真綿で飾り縫がしてあり、生絹一重の附紐は上前、下前の紐附位置が段違いになっている。
振附小袖がしるしばかりのように附いている。襟附線

褪色が見られるが後染の紅の紬で、(3)の産衣の赤色に比し色が数段と薄い。(2)段織綾産衣、(3)緋絹産衣と共に家康から贈られた産衣三領中の一領だといわれている。三領中では最も小ぶりだといえ、衽はなく、袖は袖幅が六・五センチという桃山・江戸前・中期の産衣十三領中、格別に小さい(表参照)振附小袖がしるしばかりのように附いている。襟附線

(4) 伝毛利秀就所用紅紬産衣(図版Ⅲd、挿図12、13、14)

(形状、法量、仕立て方)

生絹の附紐は損傷して大部分が失われているようであるが、後は紅の褪色ぐらいで保存はかなり良好である。

形状、法量は一覽表の(4)並びに挿図14。前述のように衽がなく、襟附に真綿の飾り縫があり、紐附の位置は段違いになっており、申し訳ばかりのように小さな振附小袖がついている産衣で、果して他の産衣同様の目的で用いられたかどうかは疑問である。

この産衣でも、左右同寸法であるべき左右相称の個所が、〇・五センチから二センチ異り、袖下の縫代も右袖は前に、左袖は後に入っているといったように不統一で、室町・桃山期特有の仕立て方の鷹揚さが見られる。

裁ち方は(2)(3)同様、小裁でありながら後身頃に二裂を用いた背縫のある仕立てで、守縫はない。背縫の折被せは表も裏も今日われわれがいう正常な方向、即ち表も裏も左側の身頃が高く(上に)なっている(美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照)。

この産衣の紐通し穴は、袖の振や身頃脇の身八つ口が兼ねる方法になっている。振や身八つ口には補強のための留は見当らない。

襟には裏襟がついており、裏襟の裂は裏裂と共の白木綿である。

襟附線に添っている白真綿の飾り縫は約三センチ(曲の一寸)の針目で、背面には背縫を挟んで左右の身頃にそれぞれ一針目ずつ、前面には左右の身頃にそれぞれ十二針目ずつ飾ってある。

附紐はその襟附線に添った飾り縫を跨ぐように上を渡って縫いつけてある。

上前の紐は襟幅の六センチの位置で切り離たれ失われているが、下前の紐は約二九センチ残っている。挿図14の実測図に示したように紐幅は約四センチで、上前についている六センチ強の間の紐の色は白で、下前の紐は実測図の下方に示したように紐附の側から一三・五センチの間が萌黄、その後は二・一センチ

間隔で黄と白が交互になっている。この生絹の紐の色替りは先染で行われている。またこの紐は一重で、単に裂を縦に引きさいただけのものを両側は裁ち切りのまま使用している。これは、生絹と練絹の違いはあれ、徳川秀忠産衣(1)の附紐と同様だといえる。

仕立ては(2)(3)同様丁寧ではなく、どちらかというと粗い縫製である。縫目は平縫が〇・三センチから〇・四センチの針目、くけ目が一センチから一・二センチの針目になっている。縫糸には、表にも裏にも、表と裏の縫合わせにもS撚の白絹糸が用いてある。

(表 裂)

経糸、緯糸共に紬糸の紬で、紅の後染、褪色が見られる。密度は一センチ間に、経糸は二四本前後、緯糸は二六越前後から三〇越前後、経糸、緯糸共にS撚。

(紐 裂)

生絹で、先染。経糸は自然色の白で二本ずつ寄っている。緯糸は残存する部分でわかる限りでは萌黄、黄、白の三色が、白―六センチ幅、萌黄―一三・五センチ幅、黄と白が交互に二・一センチ幅七段となっている。密度は一センチ間に、経糸は四〇本前後、緯糸は三〇越前後から四〇越前後である。

(裏 裂)

白木綿で、経糸、緯糸共にS撚で、撚は比較的強い。密度は一センチ間に、経糸は一四本前後、緯糸は一二越前後である。

- 1 徳川実紀卷三天正六年、天正十六年、姓氏家系大辞典第二卷三九三頁江戸將軍略譜二代台徳院秀忠。
- 2 防府・毛利博物館調べ。
- 3 名古屋・徳川美術館調べ。
- 4 白石・片倉信光氏調べ―仙台人名大辞書一頁伊達家系譜のうち、伊達家二十世綱村、同六七六頁伊達綱村。仙台市史第七卷一一七―一一九頁伊達綱村。
- 5 白石・片倉信光氏調べ―仙台人名大辞書一頁伊達家系譜のうち伊達家二十一世吉村、同六七六頁伊達吉村。仙台市史第七卷一九一―二二頁伊達吉村。
- 6 白石・片倉信光氏調べ―仙台人名大辞書一頁伊達家系譜のうち伊達家二十一世吉村、同六七六頁伊達吉村、片倉代々記。
- 7 一つ身には背縫がないため背の中央の目標も兼ねてであろうか飾り縫をする習慣がある。通常、挿図4のように背縫線の位置に、二目おとしの表針目(女兒)、二目おとしの裏針目(男児)を施すのを守縫、桜、鶴、星、風車等の飾り縫を施すのを背守といっている。参考文献―和服裁縫系統的精説(石田はる著、昭和七年初版本)上巻83・84頁。
- 8 古事類苑産業部十八の木綿、日本歴史大辞典(河出書房新社)「綿織物」「木綿」。
- 9 織機の経糸を巻いておく木で、糸を巻く中央部分は細く、両端は巻いた糸がはずれて落ちないように太くなっている。
- 10 法然上人絵伝や春日験記に見られるちきり文には紋章形ちきり文が多く、それらに混って単独のちきりが所々に入っている。
- 11 通常段織りでは織る前に経糸を縛って絰風に染めてから織機にかけるが、そのような経糸の色替りを作成することを締切りという。
- 12 文文は織文様の一かえり(one repeat)の長さを、窠間幅は織文様の一かえりの幅をいう。
- 13 経糸に精練しない生糸を用い、緯糸(横糸)に精練した練糸を用いて平組織に織った絹織物で、経糸は緯糸にくらべて目立って細く、また緯に比して経の糸数が多い。表面に独特の光沢があり、薄手で張りのある生地である。室町・桃山時代の平絹にはこの練緯が多い。